

東洋文庫シンポジウム

“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks:  
Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere”

(2013年3月2・3日)

新免 康

2013年3月2日(土)・3日(日)の2日間にわたり、財団法人東洋文庫(以下、東洋文庫)の主催により、中央アジアに関する国際シンポジウムが開催された。ここでその概要について報告したいと思う。(以下、敬称略)

本シンポジウムは、東洋文庫の「超域アジア研究部門」における「総合アジア圏域研究班」の枠で行われた。「総合アジア圏域研究」の趣旨は、東洋文庫のウェブサイトに掲載された紹介にしたがえば、「年度ごとに重点地域を定め、それをアジア規模の視野から多角的に検討するとともに、周縁諸地域との地域連関や相互影響関係を検討する。範囲は、基礎資料研究、現地研究、主題研究などに跨り、多分野間のまた国際間の比較研究を行う。また、資料、検討過程並びに研究成果は、英文電子情報としてオンラインにより発信する。」というものである。その今年度のテーマとして、「中央アジア圏域の動態をめぐる総合アジア圏域研究」が設定され、「中央アジアをめぐる多角的な地域関係がアジアの中でどのような位置を占めており、アジアの地域連関にどのように影響しているかにつき内外からの検討を加える」ことが課題とされた。

本シンポジウムは、3月2日午後の第1セッション、3月3日午前の第2セッション、および同日午後の第3セッションから構成された。全体のオーガナイザは東洋文庫研究部長の濱下武志、各セッションのコーディネイタを担当したのは梅村坦(第1)、小松久男(第3)、そして筆者(第2)である。会議言語は、ディカッションを含め、基本的に英語であった。以下、当日配布のプログラム冊子に掲載されたアブストラクトを参照しつつ、セッションごとに各報告の内容について簡単に紹介する<sup>(1)</sup>。なお、各セッションのタイトル、各報告者とその報告タイトル、および各セッションのコメントについては、本稿末尾に掲げたプロ

<sup>(1)</sup> 本シンポジウムにおける報告のかなりの部分は、筆者の研究とはまったく異なる分野に関わるものであるため、本稿における紹介内容には誤解や理解不足の点が含まれている可能性が高い。その点、ご諒解いただければ幸いである。

グラムを参照されたい。

第1セッションでは、出土資料などに現われた人名に焦点を当て、その言語・文字という側面から中央アジア地域<sup>(2)</sup>の文化の多様性について議論された。土肥義和の報告は、敦煌の諸種の文書や記録に見える人名を精査した結果を基に、その居住民の大部分は漢族であったが、少数民族も混住していたことを明らかにした。その上で、漢語による姓氏名として150姓を数える人々が居住しており、その中には西域胡姓や鮮卑系・羌氏系諸族の姓が含まれていること、漢族以外の民族の人を民族名・部落名・地名を用いて示した例が見られること、10世紀に敦煌の仏教教団と西州回鶻仏教教団の間で經典を通じた交流があったこと、などを指摘した。Peter Ziemeの報告は、トルファンや敦煌の文書上に表れるキリスト教徒人名に注目することを通して、シリア語・ソグド語・古代ウイグル語という3言語によってキリスト教信仰の存在が確認されること、古代ウイグル語文書からキリスト教徒コミュニティの様相が窺われること、キリスト教徒が他の宗教の信者と交流していたこと、元代のみならず天山ウイグル王国治下にもウイグル人キリスト教徒が存在したことを論じた。また、それらキリスト教徒人名の起源について分析を加えた。Nicholas Sims-Williamsの報告は、クシャーン朝期からイスラーム初期にかけての期間、羊皮紙、布片・木簡、碑文、貨幣銘文、印章、銀器など広範な資料中に見出されるバクトリア語のテキスト中に、500を超える様々な人名が確認できること、それらの中には、バクトリア語起源の語形に加え、西イラン諸語、ソグド語、インド諸語、テュルク語、アラビア語、ラテン語など実に多様な言語に由来する人名が含まれていることを明らかにした。武内紹人の報告は、主に資料中の人名の特徴に基づき、6世紀後半におけるチベット国の建国とその後の発展にともなう、チベット語の影響について論じた。とくに、チベット高原の諸民族がチベットの統治体制に組み込まれながら、ある程度民族的・言語的アイデンティティを保持したこと、中央アジア・河西への進出にともないその支配下に入った漢人・コータン人などがチベット語化した名前を持つようになったこと、チベット国滅亡後もチベット語が中央アジアに流布していたこと、などを指摘した。

第2セッションでは、歴史資料・歴史叙述における中央アジアの地域イメージについて、中国（主に清朝）、ロシア帝国・ソ連、および中央アジアの視点から検討する報告が行われた。小沼孝博の報告は、清のカシュガリア・オアシス地域征服後の政策のあり方に関する考察を通じて、清朝が中央アジア地域とその居住民をどのように認識し、どのように統治体制の中に位置付けたかを明らかにした。とくに清朝が「卡倫」内外の様々な人々を、「エジェン」（＝主人）たる皇帝の「アルバト」（＝平民・属民）と措定して、このような関係性に関する観念を軸に支配秩序を作り上げようとしたこと、現地ムスリム住民にとって清朝の支配とは

<sup>(2)</sup> 本シンポジウムのとくに第1・第2セッションにおいては、旧ソ連領中央アジアのみならずその周辺地域を含む広域的な中央アジア地域に関わる問題が扱われた。

清朝皇帝に対する人的従属のみを意味したこと、などを示した。帯谷知可の報告は、トルキスタン総督府において編纂された中央アジアに関する文献・記事のコレクションである「トルキスタン集成」に注目し、帝政ロシアの中央アジアに関する植民地的な「知」の一体系と見なされる当該コレクションに、帝政ロシアの中央アジアに対する眼差しが反映されていることを論じた。具体的には、インデックスのカテゴリー分類と資料原本との数量的・内容的対応関係に焦点を当て、帝政ロシアが中央アジアに対しどのような関心をもっていたかを考察した。Ablet Kamalov の報告は、ソ連領の中央アジアでウイグル学 (uygurovedeniye) として知られる学術的な分野において、新疆がどのように表象されたかを検討した。その中で、中央アジアにおけるウイグル研究とソ連中央におけるそれとの間に、とくにウイグルの民族起源や新疆における先住性といったトピック、中央アジアとの関係性に関する議論において顕著な違いが生じるなど、ソ連におけるウイグル研究には新疆史の叙述のされ方においてかなり複雑な状況が見られたことを指摘した。

第3セッションにおいては、中央アジアにおけるイスラーム復興の様相について、中近東や南アジアとの相互関係という視点からの議論が提示された。Stéphane Dudoignon の報告は、長年にわたる調査をもとに、中東と中央アジアをつなぐ広域的な領域において幅広く相互に関連するイスラームの現状を理解するために、ここ数十年間における大規模な変化の様相とその意義について検討した。とくにソ連末期における人の移動の活発化やソ連解体後のタジキスタン内戦期における宗教学者や学生の国外イスラーム地域への大々的な越境などを背景とした、イスラームをめぐる中央アジア地域社会の注目すべき変容について指摘した。Bayram Balci の報告は、ソ連崩壊後の中央アジアと南アジア地域との関係におけるジャマアト・アル・タブリーグの活動とその役割について論じた。とくに、クルグズスタンとカザフスタンでジャマアト・アル・タブリーグの影響力が相対的に大きいこと、ジャマアト・アル・タブリーグはとくにイスラームの実践に重点を置いた活動を推進していること、他のイスラーム運動との比較において興味深い側面があることを示した上で、これらの現象の背景について考察を加えた。山根聡の報告は、英領インドのムスリムの間における、世界を「ダール・アル・イスラーム」と「ダール・アル・ハルブ」に分ける領域概念に基づく議論に着目することを通して、現代南アジアにおけるムスリムの動態の特徴的な側面に光を当てた。とくにインドを「ダール・アル・ハルブ」とする説が広まったことは、アフガニスタン移住の動きを顕在化させ、その後インドの領域内に「ダール・アル・イスラーム」の領域を創出しようとする動きへと繋がっていくという点で、重要な意味をもつことを指摘した。

以上のように、各セッションにおけるテーマ設定の下、いずれも興味深い報告が行われたと言えよう。本シンポジウムにおいて、中央アジアをめぐる様々な領域を専門とする研究者たちが相互に知見を深めることができ、様々な時代・分野・テーマにまたがる学術交流の

場となった点は特筆に値する。また、フロア参加者の大半が各セッションの関連分野の専門家によって占められていたため、各コメンテータの触発的なコメントもあいまって、ディスカッションも学術的観点からきわめて有意義かつ刺激的なものであった。とりわけ本シンポジウムにおいて目玉となったのは、まさにそれぞれの分野において権威とも目される各報告者とコメンテータたちの存在であったと考えられる。これらの研究者による、水準の高い最新の研究成果や独自の視点・見解の提示に触れる機会を得られたことは、筆者を含め、本シンポジウム参加者にとって大きな特典であった。

若干気になった点にも触れておこう。第一は、セッション間の関係に関わる点である。各セッションのテーマがそれぞれ独立的であり、とくに1日目のイスラーム化以前に関する研究と2日目のイスラーム化後に関する研究との間で、対話や交流がやや薄かった面があることは否めない。第二は、外国から招聘された研究者たちの顔ぶれに関わる点である。これら研究者5名のうち4名は、ヨーロッパからの著名な専門家たちによって占められた。関連する各分野におけるヨーロッパの学界の圧倒的に分厚い研究蓄積と高度な研究水準という点に鑑みれば、このことは順当である。しかし、中央アジア「現地」において新しい資料の開拓が進むとともに、欧米や日本の研究者と中央アジアの研究機関・研究者との密接な連携において様々な研究が行われていること、また、中央アジア出身の研究者たちによって優れた成果が挙げられつつあることなど、近年の中央アジア史研究をめぐる特徴的な動向を考慮するとき、結果的に中央アジア地域からの研究者が一人にとどまったという状況については、少し考えるべき点もあるように感じられた。

なお、本シンポジウムによる成果は、近日中に東洋文庫のウェブサイトへの要旨集の掲載という形態で公開されることになっている。昨年度の本シンポジウムに続き、2013年度はインド・南アジア、2014年度はイスラームと中国、を中心的なテーマとする国際シンポジウムが開催される予定であり、大いに期待されるところである。

---

## プログラム

日程：2013年3月2日（土）～3日（日）

会場：財団法人東洋文庫・講演室

主催：財団法人東洋文庫

共催：NIHU イスラーム地域研究東京大学拠点

◇ 3 月 2 日 (土) ◇

Keynote Speech (13:30-13:45)

Organizer: Hamashita Takeshi (Research Department Head, Toyo Bunko)

【第 1 セッション】 (13:45-16:45)

The Multi-dimensional Character of Central Asian Cultures as Seen from the Variety of the Scripts and Languages of Excavated Texts

Coordinator:

Umemura Hiroshi (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Chuo University)

Dohi Yoshikazu (Research Fellow, Toyo Bunko)

“The Dynamism Inherent in Han Chinese Personal Names as Shown in Index of Chinese Surnames Appearing in the Dunhuang Chinese Documents Dating from the Late 8th to the Early 11th Century”

Peter Zieme (Professor, Institute of Turcology, Free University, Berlin)

“Personal Names of Central Asian Christians: Focusing on Old Uighur Manuscripts”

Takeuchi Tsuguhito (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Kobe City University of Foreign Studies)

“Various Ethnic Groups with Tibetan Personal Names in the 9th-12th c. Texts and Inscriptions”

Nicholas Sims-Williams (Professor, SOAS, London University)

“Personal Names in Bactrian Sources and Their Varied Ethnic Origins”

Commentators:

Yoshida Yutaka (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Kyoto University)

Matsui Dai (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Hirosaki University)

Reception

◇ 3 月 3 日 (日) ◇

【第 2 セッション】 (9:30-12:30)

The Regional Image of Central Asia as Portrayed in 18th-20th Century Historiography: Central Asian, Chinese and Russian Perspectives

Coordinator:

Shinmen Yasushi (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Chuo University)

Onuma Takahiro (Associate Professor, Tohoku Gakuin University)

“The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors”

Obiya Chika (Associate Professor, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)

“Imperial Russia’s Eyes on Central Asia: Turkestanskii Sbornik as a Set of Colonial Knowledge”

Ablet Kamalov (Chief Research Associate, Institute of Oriental Studies named after R.B. Suleimenov under the Ministry of Education and Science of Republic of Kazakhstan, Almaty)

“Xinjiang in the Focus of Uyghur Studies in Soviet Central Asia”

Commentator:

Nakami Tatsuo (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies)

**【第3セッション】 (13:30-16:30)**

The Revival of Islam in Central Asia: Links with West and South Asia

Coordinator:

Komatsu Hisao (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Tokyo University of Foreign Studies)

Stephane Dudoignon (Senior Research Fellow, Centre National de la Recherche Scientifique, Paris)

“Interactions between the Near and Middle East, Central and Inner Asia in the Muslim Religious Field”

Bayram Balci (Visiting Scholar at Carnegie Endowment for International Peace, Washington DC)

“The Jama’at al Tabligh in Kirghizstan and Kazakhstan and Its Contribution to the Recreation of Islamic Relations between Central Asia and Indian Subcontinent”

Yamane So (Professor, Osaka University)

“Think Umma, Use the Modern-Networks of Modern Muslim Intellectuals in South Asia, 1900-1930”

Commentator:

Uyama Tomohiko (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Slavic Research Center, Hokkaido University)

(中央大学文学部)